

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 翻訳の基準と理想

「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思える翻訳」は、翻訳の質を判断する際の基準であると同時に、翻訳者が目指すべき目標でもある。

ひとさまの誤訳(第七回)

柴田耕太郎

- 『あなたに似た人』(ロアルド・ダール作、田村隆一訳、早川書房)

比較的よい作品と、訳も文章も悪い作品とに極端に分かれる。意地悪な見方だが、使った下訳者の力量の差が出たのではないかと思う。どうせなら、詩人、田村隆一の想像力で、思いっきりそれらしく書き換えてほしかった。

翻訳のための日本語力

津森優子

- 丸谷才一『文章読本』/ 斉藤美奈子『文章読本さん江』

翻訳のための日本語力を鍛えるにはどうすればいいか。数多ある文章指南書の中から、翻訳に役立つ本を紹介する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳の基準と理想

先月号で「原著者が日本語で書くとすればこう書くだろうと思える翻訳」ができる翻訳家はきわめて少ないと指摘した。これを読んだ友人が、そこまで基準を引き上げたら依頼できる翻訳者がいなくなるという感想を聞かせてくれた。

この友人は産業翻訳を発注する立場にあるので、先月号で取り上げた出版翻訳とは若干事情が違う。それでも、翻訳の質という点では同じような問題を抱えている。ふだん、翻訳の質をもっと高めてほしいと考えているのだが、かなりの程度までは目をつぶらなければ依頼できる翻訳者はいなくなるというのだ。

何とも忘れっぽい男だと思った。つい 10 年少し前には、英和辞典にでていない訳語を使ったというだけで「ここは意識しましたが、よかったですか」とお伺いをたてる翻訳者がいた。たとえば、include を「～などがある」と訳したとき、one of the most ... を「とくに」と訳したときなどに、こういう言い訳が必要だと考える翻訳者が少なくなかったのだ。いまではたぶん、専門用語ならともかく、ごく一般的な言葉についてこのようなお伺いをたてる翻訳者はほとんどいないのではないだろうか。

10 年少し前には、include とか one of the most ... とかのごく普通の言葉で英和辞典にない訳語を使うのは禁忌とまではいわなくても、少なくとも冒険だという感覚があった。逆にいえば、翻訳で使う訳語は決まっており、英和辞典に書いてあるという感覚があった。訳語だけではない。構文についても訳し方は決まっており、文法書に書いてあるという感覚があった。要するに翻訳とは、決められた訳語、決められた構文を使って原文を日本語にしていくことだという見方が強かったのである。いまはこういう見方は力を失っている。その証拠に、英和辞典にでていない訳語を使ったというだけで「ここは意識しましたが、よかったですか」とお伺いをたてる翻訳者はほとんどいなくなった。10 年少し前の感覚を覚えていて、いまといかに違っていったかに思いをめぐらせていけば、そこまで基準を引き上げたら依頼できる翻訳者がいなくなるという感想はでてこなかったはずだ。だから、忘れっぽい男だと思うのである。

翻訳とは決められた訳語、決められた構文を使って原文を日本語にしていくものだという見方は、学校英語の英文和訳でたたきこまれたものだ。このため、たいいていの翻訳者に馴染みのあるものだ。そして学校英語のなかでも受験英語は目的に合わせて最適化され、効率化されている。構文と単語や連語のそれぞれに一对一対応に近い形で「正解」が決められているので、原文の意味を考える必要もなく、訳文がすぐに機械的に書ける仕組みになっているのだ。だから、受験英語をしっかりと学んでいれば、翻訳はできて当たり前、できなければ恥だという見方が以前には強かった。

たしかに、決められた訳語、決められた構文を使って原文を日本語にしていくのであれば、翻訳は簡単な仕事である。だが 10 年少し前にすでに、そういう見方にしがたって作られてくる翻訳が使い物にならないことがかなりはつきりしていた。ある時期に英文和訳型の翻訳が日本の社会で一定の役割を果たしてきたのは事実だとしても、「ここは意識しましたが、よかったですか」とお伺いをたてるような感覚では社会の要請にこたえられる翻訳ができない状況になっていたのである。

だから、英和辞典にない訳語を使うと「意識」だとはほとんど誰も思わなくなったのは、翻訳に関する世間の認識に合わせて、発注者と翻訳者の価値観が変わったことを示しているといえるはずである。

だが、問題もある。20 年ほど前には翻訳とは決められた訳語、決められた構文を使って原文を日本語にしていくものだという見方が強かったので、翻訳はいかにあるべきかを考える必要はそれほどなかった。いまでは、翻訳とは英文和訳と違うものだという点で、おそらくほとんどの発注者や編集者の見方は一致している。しかし、では翻訳はどうあるべきかという点になると、「読みやすい翻訳がいい」という漠然とした見方があるだけだ。

では、「読みやすい翻訳」とはどういう翻訳か。「読みにくい翻訳」だということ、お叱りを受けるかもしれないが、本来の意味はそうだ。英文和訳型の翻訳を「読みにくい翻訳」と呼び、英文和訳型ではない翻訳を「読みやすい翻訳」と呼んだ。これがもとも

との意味だ。だから、「読みやすい翻訳」という言葉には積極的な意味はない。どのような翻訳を目指すべきかを示す言葉ではなく、どういう翻訳では困るかを示しているだけである。

「読みやすい翻訳」が合言葉になって、過去 10 年ほどで、英文和訳型の翻訳は完全に主流から外れたと思える。だから「読みやすい翻訳」という言葉は十分に役割を果たしたといえるはずである。

だが、言葉は一人歩きする。「読みやすい翻訳」を文字通りに受け止めると、幼稚な日本語で書かれている方がいいということになりかねない。原文の味わいや微妙なニュアンスをすべて取り去り、理解が難しい部分をはしょって簡単にすれば、たしかに文字通りの意味での「読みやすい」文章になる。それでいいのだろうか。いいわけがない。

英文和訳型の翻訳は原文に忠実な翻訳を標榜していた。だが、原文そのものに忠実に訳そうとしたのではない。原文の構文と単語の訳し方として英文和訳で教えられている方法を忠実に守って訳そうとしたのだ。その結果、英文和訳型の翻訳では、原文に忠実といいながら、原文とは似ても似つかぬ訳文ができるのが普通だ。つまり、原文に忠実に訳すという目的を達成できないのである。問題はここにあるのであって、原文に忠実に訳すという目的にはない。

「原文に忠実に訳す」というのは、いってみれば同義反復である。訳すという以上、原文に忠実でなければならぬ。これに対して「読みやすい翻訳」は、自己矛盾に陥りかねない。文字通りの「読みやすさ」を追求すれば、一部の例外を除いて、翻訳ではなくなる可能性がある。「読みやすい翻案」になりかねない。

だから、「読みやすい翻訳」に代わるものとして、新しい言葉が必要なのだと思う。そのような観点から提案しているのが、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思える翻訳」である。

英文和訳型の翻訳はほんの 10 年少し前まで、ほとんどの分野で主流だったが、いまでは逆に、ほとんどの分野で主流ではなくなった。この点を考えれば、価値観が意外にあっさりと変わることが実感できるはずである。なぜそれほどあっさり変わるのだろうか。

その理由を理解するカギは「主流」という言葉にある。変わるのとは何が「主流」かだけなのだ。つまり、

英文和訳型の翻訳と「読みやすい翻訳」の例でいうなら、英文和訳型の翻訳はいまでもあるし（ありすぎるほどあるし）、「読みやすい翻訳」は以前にもあった。世の中が微妙に変わり、読者の要求が微妙に変わったとき、それまで主流であった英文和訳型の翻訳は力を失い、それまで傍流であった「読みやすい翻訳」が流行りになった。

いつの時代にも翻訳にはさまざまなスタイルがある。そのなかで言い訳を必要としないスタイルが主流である。よほどの力や権威がある翻訳家ならともかく、並みの翻訳者なら言い訳を必要とするスタイルが傍流である。たとえばいまでは、ひとつ前の時代に主流だった英文和訳調で訳すとき、「時間がなかったもので、少々直訳的になっていますが、よかったですか」といった言い訳が必要になることが少なくない。逆に、英和辞典にない訳語を使ったときは、言い訳が必要になるどころか、自慢のタネにすらなる。

翻訳者個人にとって、考え方はそう簡単に変わるものではないし、翻訳のスタイルはそう簡単にえらばれるものではない。それでも、世の中全体としてみれば、翻訳のスタイルは変わっていく。英文和訳型ではない翻訳を目指してきた翻訳者は、強い向かい風を感じなくなって、ある程度まで自由に仕事ができるようになる。英文和訳型を当然としてきた翻訳者は強い向かい風を受けるようになり、しぶしぶながらも妥協しようとする。

とくに重要なのは、新しい世代の翻訳者だろう。英文和訳調では新規に参入するのがむずかしいので、英文和訳型ではない翻訳ができる翻訳者が自然に増えていく。だがそれだけでなく、新しい世代の翻訳者にとって、実力を高めようと努力する際に、目指すべき理想をはっきりさせておくことが不可欠である。前述のように、「読みやすい翻訳」はどのような翻訳では困るかを示しているだけなので、理想にはなりえない。そこで提案するのが、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思える翻訳」である。

「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思える翻訳」は、翻訳の質を判断する際の基準であると同時に、翻訳者が目指すべき目標でもある。また、森鷗外や吉田健一ら、明治以降のすぐれた翻訳家がとってきたスタイルでもある。そこまで基準を厳しくしたら依頼できる翻訳者がいなくなると心配する人がいるのも理解できなくはないが、理想は高い方がいいに決まっている。

『あなたに似た人』(ロアルド・ダール作、田村隆一訳、早川書房)

六月号で開高健訳のロアルド・ダール作品『キス・キス』(原題 KISS KISS)を取り上げたが、*The collected short stories of Roald Dahl*(PENGUIN Fiction)には、このほか四つの短編集が収められ、廉価(邦貨で2500円ぐらい)でダールの軽妙な語り口を楽しむことができる。原文を読むのが面倒な向きには、いずれの短編集も早川書房から文庫版で出ている。『飛行士たちの話』(OVER TO YOU、永井淳訳)『来訪者』(SWITCH BITCH、永井淳訳)『あなたに似た人』(SOMEONE LIKE YOU、田村隆一訳)『王女マメリア』(EIGHT FURTHER TALES OF THE UNEXPECTED、田口俊樹訳)。それぞれ訳者も異なることから、これは面白いと思い、すべてを原文とつき合わせ、訳の巧稚、誤訳・悪訳をみてみた。

最悪なのはすでに検討した開高健訳『キス・キス』。ベテラン永井淳訳は真面目で誤訳も少ないが、面白みに欠ける。油が乗っている年代の田口俊樹訳は、永井訳よりは誤訳が多く、コロケーションがよくないところが散見される。

そして田村隆一訳だが、比較的よい作品と、訳も文章も悪い作品とに極端に分かれる。『味』『おとなしい凶器』はさらっと読めるのに、『クラウドの犬』『偉大なる自動文章製造機』は読んでいて実にイライラする。

どうして、同じ訳者でこうも訳文の質が違うのだろうか。作品との相性もあるうし、また「ダールにも結構愚作がある」(阿刀田高の解説)から、作品自体の質が訳文に現れるのかもしれない。そしてもう一つ、意地悪な見方だが、使った下訳者の力量の差が出たのではないかと私は思う。

田村は英語があまり得意でなかった、とは周辺からの確かな話である。寝る前に英文法を読み続けたり、人を誘って英会話を習いにいったりしたと聞くが、ものにならなかったようだ。

詩人であるから文章には自信があったのだろう。人に訳させたものを、自分がリライトする。好きなものであれば乗りもよくなるのが道理。推理小説よろしくワインの原産地を特定してゆく『味』(TASTE)は、このやりかたが成功した例といえるだろう。

早川書房の初代編集長を務め、「編集者としての田村は、その感覚はユニークである一方、きわめてその

場しのぎで無責任であった。しかも、企画の受け入れ、変更、思いつきは、融通無碍で、成功もした」(『戦後「翻訳」風雲録』本の雑誌社・宮田昇)というようにジャーナリスティックな感覚がある田村は、ダールを植草甚一からの情報で知った、とあとがきに記している。私の手元にある版で『あなたに似た人』は三十六刷(2000.10.31.)だし、ほかに人気筋のアガサ・クリスティーの主要作品も嗅覚鋭くいち早く手がけているから、「(印税が)晩年の彼の大きな収入になっていたはずである」(同書)ことは、偉大なる無頼派詩人のため慶賀したい。

ましな作品とまずい作品を、その冒頭部分で比べてみよう(番号、下線は私がつけた)。

・ましな作品---『味』

その夜、ロンドンのスコウフィールド家の晩餐の席にいたものは、私たち六人だった。マイク・スコウフィールド夫妻とその娘、私と妻、それにリチャード・プラットという男。

リチャード・プラットは、有名な美食家で、<食道楽の会>という名で通っている小さな集まりを主宰し、毎月、料理とワイン・リストを、会員のためだけに配っていた。また、高級料理やめずらしい葡萄酒などが出る晩餐会を催したりした。彼は、味覚のそこなわれるのをなによりも恐れて、タバコはやらなかったし、話が葡萄酒のこととなると、まるで人間のことで喋っているような奇妙な、いや、私に言わせれば滑稽な癖があった。

THERE WERE SIX OF US to dinner that night at Mike Schofield's house in London: Mike and his wife and daughter, and my wife and I, and a man called Richard Pratt.

Richard Pratt was a famous gourmet. He was president of a small society known as the Epicures, and each month he circulated privately to its members a pamphlet on food and wines. He organized dinners where sumptuous dishes and rare wines were served. He refused to smoke for fear of harming his palate, and when discussing a wine, he had a curious, rather droll habit of referring to it as though it were a living being.

「料理」と「ワイン・リスト」と読めるが、本当は「食品とワインについての冊子」。「料理とワインのリスト」ぐらいがよいか。

living being「生き物」curious「人の興味をそそる」
「一風変わった」rather「もっと言うと」refer to
「(あることを)具体的に言い及ぶ」：「それがあたかも生き物であるかのように評するちょっと変わった、
というか可笑しな癖があった」

細かく言うと以上のようなケチはつけられるが、普通に読む分には、あまり気にならないし、小説の出だしとしての語調もリズムもよい。先を読んでゆこうという気にさせるから、これでよいのだろう。

・まずい作品---『偉大なる自動文章製造機』
デスクの男は、たまただ新聞を手許にひきよせると、読みはじめた。
＜ さきごろ、政府命令によって開始された、大自動計算器の建造が、このほど完了の運びとなった。これは現在、世界でもっとも計算の速い電子計算器といえるものである。その構造は、科学および工業にとって、焦眉の必要性を満足させるものであり、過去の旧式な構造によっては、実際には不可能視され、あるいは問題が解決されるにしても、まだかなりの年月は必要とされていた。数学計算の迅速性にとっては、非常な驚異と言わねばなるまい。その構造一切の主責任者であり、電気技術協会の主任であるジョン・ボーレン氏によれば、あたらしいエンジンによるスピード能力は、普通、数学者にとって一ヶ月を要する問題に対し、わずか五秒のうちに、正確な答えを算出すること が実際に可能のはずとのことである。三分間のうちには、人間が計算すれば(それが可能としての話であるが)五十万枚の計算紙を必要とする計算が、なしとげられるのである。この自動計算器は、一時間に百万振動を起こす電気の振動を応用、すべての計算を加減乗除にかえて解答する仕組みとなっている。実際の応用面は、無制限であり、なににたいしても...＞

* 以下、 はそのままでもよいもの、 はできれば変えたいもの、 × は変えないとまずいもの、 : 以下はその理由

「さきごろ」「しばらく前」：うるさく言えば、時間の長さが違う

× 「政府命令」「政府機関の注文」：語義を狭めるのと、語義を選ぶのと

「大自動計算器」「大自動計算機」：器ではちやちな感じ

「建造」「構築」：うるさく言えば、おあげさ

「完了の運びとなった」「完成した」：うるさく言えば、完了・状態

「電子計算器」「電子計算機」：器ではちやちな感じ

× 「構造」「役割」：語義を選ぶ
× 下に別記した：構文の取り違い
× 「構造一切」「製作」：意味の取り違い
× 「電気技術協会の主任」「電機会社の社長」：語義を選ぶ
× 「エンジン」「機械装置」：語義を選ぶ
「スピード能力」「スピード」：修飾過剰
「が実際に可能のはず」「で理解されるだろう」：こまかく言えば
「自動計算器」「自動計算機」：器ではちやちな感じ
「電気の振動」「パルス信号」：専門語らしく
「計算」「演算」：専門語らしく
「実際の応用面は」「実際に対応できる計算は」：より正確に

はめちゃくちゃな訳だが、どうしてこうなったのだろう。推理してみる。

function を「構造」と取ったのがつまずきの元。次に science, industry, and administration の並列がわからなかった。それで administration 以下を独立文とし、しかも admiration とおそらく勝手に読み替えた。おまけに仮定法が苦手で、反実仮想を未来に読み違えた。さらに which の先行詞がわからぬため、非制限用法風に訳した。その結果、文が分裂して、主語、述語、意味がとれない不可思議な文章となってしまった...

原文を分析してみる。

The man behind the desk 1<pulled a folded newspaper towards him>2<, and> began to read3<:> ‘The 4<building> 5<of> the great automatic 6<computing engine>(,7<ordered> by 8<the government> 9<some time ago>,) 10<is now complete>. 11<It> is 12<probably> the fastest 13<electronic calculating machine> in the world today. 11<Its> 14<function> is 15<to satisfy> the 16<ever-increasing> need 17<of> 18<science, industry, and administration> 19<for> rapid 20<mathematical calculation> {21<which>(, in the past, by traditional methods,) 22<would have been physically impossible>23<, or> 24<would have required more time than the problems justified>. The speed (25<with which the new engine works>) (, said Mr John Bohlen26<,> head of 27<the firm of electrical engineers> mainly responsible for its construction,) 28<may be grasped> by the fact {29<that> 11<it> can provide the correct answer 30<in five seconds> 31<to a problem> (that 32<would occupy> a mathematician for a month)}. 33<In three minutes>./ 11<it> 34<can produce> 35<a calculation> [that {by hand (if it were possible)} 36<would fill half a million sheets of foolscap paper>]. The automatic computing engine uses 37<pulses of electricity>(,

generated at the rate of a million a second.) 38<to solve> all calculations (39<that> 40<resolve themselves into> 41<addition, subtraction, multiplication, and division>). 42<For> 43<practical purposes> there is no limit 44<to (what it can do>...)'

- 1 pull ~ towards : ~を のほうへ引く(寄せる)
- 2 順接の and「そして」。カンマは前節が長いので読むのに半呼吸入れる印。
- 3 以下詳細に述べる印
- 4 立派な大型機械なので building などと大仰な言葉を使っている。「建設」はまづい。「建造」「構築」「製造」など。
- 5 目的格の of「...(of以下)を」
- 6 computing は現在分詞形の形容詞「計算する」。engine は「精巧な機械」のこと
- 7 (1)命令する (2)注文する、のうちここは(2)
- 8 (1)政治(無冠詞で) (2)政府(主として G - で) (3)政府機関、政府組織、のうち(3)
- 9 不可算名詞 time に some がつき、いくらかの時間。例：some water (いくらかの水)
「しばらく前」
- 10 is は now と結び、変化を示し「...になる」(例：I will be twenty tomorrow.)。形容詞 complete は、完成して。「完成した」
- 11 the great automatic computing engine
- 12 可能性の程度は高い(80 パーセントから 90 パーセント)
- 13 電子計算機
- 14 (1)役割 (2)機能、のうち(1)
- 15 to 不定詞の名詞的用法「満足(充足)させること」
- 16 ever = at any time。increasing は現在分詞形の自動詞の形容詞(増大する)「増えつづける」
- 17 主格の of「...(science以下)が(要求する)」
- 18 1, 2, and 3 の並列「科学、産業、行政」
- 19 目的・対象を示す for
- 20 「数学的計算」だが、このままでは訳語が稚拙「数理演算」などとしたい。
- 21 この先行詞、or の前の部分は rapid mathematical calculation、or の後の部分は calculation と分裂している悪文
- 22 「(以前であったら)まったく不可能であったはずの」
- 23 前後の would 以下を並列させる「...とか」「...だったり」(「どちらか」の選択ではない)
- 24 「当該問題の解決に当然与えてよいとされる以上の時間を要したはずの」ということ
- 25 分かりやすくすると、The new engine works with the speed.

- 26 同格を示すカンマ
- 27 「電気技術者集団会社」いわゆる「電機会社」のこと
- 28 「理解されうる」may は可能性
- 29 the fact と同格の名詞節を導く接続詞
- 30 「五秒で」in は時間の範囲・限界。「五秒以内に」ではない
- 31 「問題に対する」problem は、解決されねばならない問題のこと
- 32 仮定法「本来ならかかるはずの」
- 33 条件を示す副詞句「三分あれば」
- 34 論理的可能性を示す can「生み出しうる」
- 35 不可算名詞が可算名詞化され具体的なものに転化。ここは「計算結果」
- 36 foolscap は紙の版型の一つ。「フルスキャップ版用紙五十万枚を使って(得られるような)」
- 37 電気の波動。「パルス信号」
- 38 「解くために」to 不定詞の副詞的用法。前から結果に訳してもよい「...して解く」
- 39 このあたり掛かりかたがわかりにくい。簡単にほどくと、

All calculations resolve themselves into addition, subtraction, multiplication, and division.「あらゆる計算は加減乗除の形になる」

The automatic computing engine uses pulses of electricity to solve all calculations ...

「自動計算機はあらゆる計算を解くためにパルス信号を使う」

「自動計算機は一秒間に百万回発生するパルス信号を使って、計算自体を加減乗除の形に変えることで、あらゆる計算問題を解く」

*「自動計算機は一秒間に百万回発生するパルス信号を使って、そのパルス信号を加減乗除の形に変えることで、あらゆる計算問題を解く」は themselves と pulses が遠すぎて、文法的には不可だが、専門用語の理解としてはどうなのだろう？

40 resolve itself into : に還元する、帰着する、変わる

41 1, 2, 3, and 4 の形の並列「加減乗除」

42 理由を示す前置詞「...としては」

43 「實際上(で)は」

44 what を the things which で置き換えると分かりやすい。do は solve の代動詞。to は程度を示す「この機械が解ける事柄に関しては際限がない」

参考のため、原文と対照しやすくした直訳を示す(斜体部分は原文の矛盾箇所を修正したもの)。

机の後ろの男は自分の方に畳んだ新聞を引き寄せ、そして読み始めた。

「しばらく前に政府機関により発注された偉大な自動計算機がいまや完成した。これはおそらく今日の世界で最速の電子計算機械である。この機械の目的は、過去において従来の方法であれば、まったく不可能であったはずの高速数理演算、あるいは当該案件処理に許される以上の時間を必要としたはずの演算よりもっと速い演算、に対する科学、産業、行政のますます増大する要求を満足させることである。この構築に主として責任を負うべき電機会社の社長であるジョン・ボ・レン氏が言うには、この新機械が作動するスピードは、それが一人の数学者であれば一ヶ月掛かるはずの問題に対し五秒で正解を出すという事実によって理解されるだろう、とのこと。三分あればそれは、手作業で(そんなことが出来ればの話だが)フルスクラップ版の紙五十万枚を埋めるはずの計算の結果を生み出すことができる。この自動計算機械は、計算を加減乗除に変換するやりかたでそのすべての計算を解くために、一秒間に百万回の割合で発生する電気信号を用いている。実際

上、これが解きうるところのものには際限がない」

どうしてこんな誤訳がおこったのか。下訳者が実力不足、田村の得意分野でない、原文が難しい、といったところだろう。

それで直しようがなく、下訳をそのままなぞったと思われる。でもどうせなら、詩人、田村隆一の想像力で、思いっきりそれらしく書き換えてほしかった。フランスの実存主義哲学の巨人で、翻訳にも造詣深かったガブリエル・マルセルはこういつている。「翻訳されたテキストは、原文がなくともそれ自体立派に作品として通用するものでなくてはならない。たとえ多少の誤りがあるにせよ、正確だが耐えがたいフランス語で書かれたものよりは、正しいフランス語のものの方がよい」(『誤訳』W・A・グロータース、五月書房)

詩人、田村の、できる下訳者を使った「創訳」で、この短編集を読んでみたかった。

株式会社 アイディ

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

平成 17 年度 【翻訳ジム】 (開講日：2005 年 3 月 1 日)

受付開始：11 月 1 日

英文が正しく読めれば、翻訳はできる。

徹底した精読による内容理解の上に立ち、

自分の文体で語ることが翻訳だと私は信じます。

瑣末な翻訳技術は教授しません。英文の読み方、

調べ方、商品となる翻訳の基準を伝授します。

1 年間、毎朝 10 ヶ月、苦しくとも楽しい授業が続きます。

翻訳者志望者、高等英語教員志望者、その他英語を正しく読み日本語で表現することが仕事につながるすべての人が対象です。

興味を持たれる方は、下記に問い合わせください。

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

事務担当 前川 / 岡里

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email: educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町 7-6、ID 河田町ビル

丸谷オ一『文章読本』 / 斉藤美奈子『文章読本さん江』

翻訳は日本語力だと言われる。日本語の文章力が肝心だと。もちろん、英文解釈力が前提なのは言うまでもない。うわべだけきれいな文章にまとめても、誤訳だらけでは意味がない。

ただ、外国作家の文章として読まれるのは翻訳者の文章である。外国作家になりかわって日本の読者を相手にする翻訳者は、日本の作家に負けにくいほどの問題意識を持って原著に取り組み、日本の作家に負けにくい文章にこだわって訳文を練り上げる必要がある。

日本の作家志望者の多くは、その修業の一環として、文章読本の類を手にとっていることだろう。それなら翻訳者も、こういう本に目を通して損はないのではないか。

文章の書きかたを説いた本は、おびたしい数が出版されており、なんとその数、4桁にも上るのだそうだ。いったいどれを読めばいいのだろうか。

それを知るには、斉藤美奈子『文章読本さん江』（筑摩書房）が役に立つ。さまざまな文章読本を分類・批評したこの本は、肩の凝らないライトな書き口で、ズバッと核心をつく辛辣な批判をくりひろげている。ユーモアありパロディありで、読み物としても断然面白い。

この本によると、谷崎潤一郎『文章読本』・三島由紀夫『文章読本』・清水幾太郎『論文の書き方』が文章読本界の御三家、本多勝一『日本語の作文技術』・丸谷オ一『文章読本』・井上ひさし『自家製 文章読本』が文章読本界の新御三家なのだそうだ。

このネーミングからしてユニークだが、決して御三家・新御三家を推奨しているわけではない。なぜこの六冊かということ、次のように述べられている。

発表年代はばらばらだが、人気、実力、知名度、売れゆき、後世への影響力などを考慮して、総合的に考えた結果である。右の六冊を特別扱いにする理由のひとつは、後世の文章読本がよってたかって参考にしていることだ。いちいち引用はしないが、その手の本を開いてみれば、この六冊への賛辞（ときには批判）がごろごろみつかるとは必ずである。（p.29）

本書はこの六冊について、それぞれの読本の内容だけでなく、執筆当時の時代背景や、読本間の熾烈な争

いも解説している。これを読めば「思ったとおりに書け」「思ったとおりに書くな」「話すように書け」「話すように書くな」といった教訓に隠された、著者たちの真意が見えてくる。偶然手にとった一冊をうのみにしてしまったら危険だということがよくわかる。

オリジナリティの必要な作家が文章作法を学んで役に立つのか、という問題提起もなされているが、少なくとも翻訳者には役に立つと思う。原著の文体・表現を読み取り、それを再現するヒントになるからだ。特におすすめしたいのが「新御三家」のひとつ、丸谷オ一『文章読本』（中公文庫）だ。丸谷自身も翻訳を手がけているせいか、翻訳に役立つ記述が多い。

現在の日本語文は、明治からせいぜい100年くらいの間に成立してきたものだ。それまでの和文と漢文を組み合わせ、日常の話し言葉とかけはなれた文体（文語文）を、話し言葉に近づけた口語文が、いま私たちの使っている文章の言葉である。（このあたりの歴史は、斉藤美奈子が作文教育の歴史を通して、わかりやすく説明している。）

丸谷オ一が言うには、口語文はまだ完成していない。近代の文章家たちは、西洋の言葉や構文を日本語に取り入れることで、新しい時代の現実に対応してきた。だが、この文体にはまだ未熟な面もある。いまなお成立過程にある現代文を書く私たちには、その完成に向けて努力する使命があると言うのだ。

言ふまでもないことだが、現代日本人が相手取らなければならないのは、和漢の融合によって成立したかつての文明と、西洋近代の文明との複合体である。前者は江戸後期にほぼ完成したが、明治維新の結果、後者が闖入[ちんにゅう]して途方もない混乱が生じたことは、まさかここで詳しく説明する必要はなからう。つまり三つの異質なものの運命的な衝突による、現代日本の特異な現実、それを何とかうまく処理してゆく論理性が現代日本語にあるかどうかといふことが論点になるだらう。わたしは残念ながらそれだけの力はまだ備っていないと判断する。当然のことだ。何しろ明治維新から数えてやうやく百年が経過しただけ。これは言語がまったく新しい事態に対応し、そして成熟するための時間としては、あまりにも短いはずである。（p.350～351）

肝心なのは、現代日本の文章が、われわれの現実

いつそう複雑なものになつたこの新しい現実に、対応するだけの機能を備へてゐないといふことなのだ。これに立ち向ふだけのものをもし創造できないならば、それはすなはちわれわれの敗北を意味するわけなのに。すなはちわれわれは玄人とか素人とかいふ区別なしに、口語文の完成のため嘗々として努力しなければならない。(p.377)

そう考えると、翻訳者の責任は重大だと言える。いまの翻訳の現実を見れば、原文に引きずられて不自然な日本語になり、日本語の質を落とす結果になってしまうことのほうが多い。だが、日本語の伝統を踏まえ、その感覚を大切にしながら原語の表現法を取り入れれば、日本語の表現を豊かにすることもできる。日本の作家がぬすみたくなるような表現だって書けるはずだ。

文章上達のためには、名文を読むこと。誰にでもわかっていることだが、結局これしか道はない、と丸谷は言う。しかし、ただ漫然と読んだだけでは効果が薄い。名文を読む際の目のつけどころを教えてください。丸谷の文章読本だ。

言葉の組み合わせかた・レトリック(隠喩、直喩、迂言法、対句、誇張法等)・表記による効果など、さまざまな文章の技術が実例を挙げて解説されている。こうした技術に目を配りながら、名文だと思ふ文章を読んでいくといい。

第12章「現代文の条件」では、特に翻訳に役立つ技術が述べられている。具体的には、複数名詞のさりげない表しかた、人称代名詞の省きかた、文末が単調にならないようにする工夫である。

「西洋ふうの厳密な記述を日本語でおこなはうとする場合、たちまち困るのは名詞の単数・複数だ」とあるが、これは翻訳でも頭を悩ませるところだ。丸谷は林達夫の『「旅順陥落」』を引いて、「～たち」というあからさまな複数形だけでなく、「外国雑誌類」「一連の事象」といった複数の表しかたを紹介している。「さんざん見せつけられてきた...やり口」「次から次へと...背負い投げを食わされた」など、文脈を通して複数であることを伝える方法も示している。

論理的な文章を書くために「近代西欧語のうち何か一つ」を勉強することを丸谷は薦めるが、欧文直訳風(特に代名詞の多用)は避けるべきだと述べている。「言葉づかひの表面での西洋かぶれは、西欧の論理を実地に身につけることとはあまり関係がない」として、作曲家のエッセイを引き、代名詞の省きかたを解説している。「まず蓄音機を床の間から紫檀[したん]のテーブルに移す。」「その箱に、そっと顔をよせると、

香料の利いたミシン油の臭いが軽く鼻をつき」といった文では、「大人の誰かが」「僕が」といった主語は省かれているが、誰の動作であるかは文脈から明らかなのだ。

また、文末が「だった」「あった」「行った」、「である」「する」「来る」などと単調になりがちなのは、「現代日本語で文章を書くに当つての大問題」だとしている。その対策として、「過去のことを述べる場合にもとところどころ現在形をませる」、「である」の多用を避ける、従属節や条件節(「～なのに」「～だから」など)で結ぶ、といった手を紹介している。こうした手はもちろん翻訳にも役立つ。ただ、あまりやりすぎると、かえって不自然になりかねない。丸谷はこの文末の問題にかなりこだわっているようだが、丸谷が手本として引いた罹災記の一節を見ると、無理に変化をつけすぎたような印象を受ける。このあたりは好みの問題もあるので、まずは自分が気に入った文章を参考にするといいだろう。丸谷も名文を次のように定義しているのだから。

ところで、名文であるか否かは何によって分れるのか。有名なのが名文か。さうではない。君が読んで感心すればそれが名文である。たとへどのやうに世評が高く、文学史で褒められてゐようと、教科書に載つてゐようと、君が詰らぬと思つたものは駄文にすぎない。逆に、誰ひとり褒めない文章、世間から忘れられてひっそり埋れてゐる文章でも、さらにまた、いま配達されたばかりの新聞の論説でも、君が敬服し陶醉すれば、それはたちまち名文となる。君自身の名文となる。君の魂とのあひだにそれだけの密接な関係を持つものでない限り、言葉のあやつり方の師、文章の規範、エネルギーの源泉となり得ないのはむしろ当然の話ではないか。(p.31)

丸谷オー『文章読本』は、書くための読みかたを教えてください。一読する価値はある。齊藤美奈子『文章読本さん江』とセットで読めば、楽しめること間違いなしだ。

筆者の紹介

津森優子

翻訳家。慶応大学文学部卒。訳書に『乙女の湖』『洞窟』(早川書房)などがある。